

3 科目概要

1年生

科目名 (科目責任者)	授 業 概 要
現代文明論Ⅰ (中田 芳子)	<p>「現代文明を考える」というテーマで、現代文明がもたらした課題について、様々な視点から考えられるよう多彩な講師陣による講義を組み立て「建学の精神と現代文明論」「現代文明の光と影」「文明の未来を考える」で構成している。そして、学生個々に人間として何をなすべきかを考える機会が持てるよう、各講義後に「問い」に対する意見を受講用紙に記載するようにしている。また、すべての講義後に、「現代文明を考える」というテーマで、学生は、各自の考えをレポートする課題に取り組んでいる。</p> <p>その結果、学生がそれぞれの視点から自分の意見を述べることができ、視野が広がっていった。また、前半の「デンマークに学ぶ」の3回シリーズに触発されて、デンマーク看護研修参加の動機づけにもなっている。</p>
現代文明論Ⅱ (中田 芳子)	<p>「生活を科学する」というテーマで、社会人として生活のもたらす様々な課題について考え、未来に向けて何をなすべきか自らの思想を培うことを目的に「生活を科学する」「生活を豊かに」「生活と社会」「生活と科学」「未来に向けて」の枠組みで構成している。講義後には講師の「問い」に対する考えを受講用紙に記載し、各自の考えを整理する機会としている。講義後には「生活を科学する」というテーマで、各自の考えをまとめる課題を課している。</p> <p>生活科学という視点から「色」「音楽」「香り」等毎回テーマが変化し、学生は現代文明論としての学ぶ意義がわかりにくくなったことがあり、講師にお願いして、各テーマと現代文明論のつながりについて説明していただいた。その結果、学生の授業態度が改善し、最終のレポートも丁寧にまとめることができていた。</p>
文化人類学 (鳥塚 あゆち)	<p>地球上の多くの人間の社会・文化に関して調査・研究し、人類文化に普遍的な法則を見出そうと努力してきた。その調査・研究の過程で、人間の文化の多様性ととともに、一見説明困難な問題に突きあたっている。そのような多様性や「謎」についての解釈を通じて、「文化とは何か」、「人間とは何か」文化人類学の著名な研究者の業績を紹介しながら系統的な学習を目指す。</p>
地球環境と科学 (内田 晴久)	<p>人類の様々な環境問題を取り上げ、人間および生命と地球環境との関係について理解を深め、我々が理想とする生活の在り方や行動のあるべき姿を実感し、己の言葉で表現し、自分の考えに基づいて他者に伝えることが出来るようになることを目指す。</p>
芸術と表現 (中村 朋子)	<p>西洋美術史上において広くその普遍的価値を認められた名品を鑑賞することを通じて、「芸術作品の持つ力」をあらためて認識し、その意味を考えてゆくことを目的とする。</p>
コミュニケーションと対人関係 (有沢 孝治)	<p>円滑な対人関係を形成していくためのコミュニケーションの基礎について学びながら、カウンセリングを基盤とした援助的な関わり方を演習を交えて学習する。</p>

発達心理学 (朝日 香栄)	人間の誕生から始まり死に至るまで、各発達段階で直面する課題・問題と発達内容について生涯発達・発達臨床的な観点から概説する。また、看護師を目指す人々にとって職業的に必要な人間理解と、様々な人との関係作りの基礎についても扱っていく。自分自身のこれまでの発達や人間関係を振り返りながら、体験的に考え人間に対する理解を深められる授業である。
経済のしくみ (安本 晋也)	科目の目的は、経済の仕組みと経済学の考え方を知ることにある。それを達成するために、三つの部分に関して進めていく。第一には、人間はなぜ経済活動を行なうのか、第二に、経済活動の主役たち（これらを経済主体とよぶ）はどんな動機で、経済制度を作り上げているのか。第三に、いまわれわれが直面している問題を解決するためにどのような経済政策をとろうとしているのか、本科目の受講者に関心があると思われるテーマを例にとって考える。
ことばと表現 (緒川 直人)	医療・看護・福祉や教育などにおいて報告書やレポート(論文)の執筆が重要である。職業人になるための必須の素養であるレポートを書くための基本的な技法と心構えを学び、表現力の向上を目指す。
国際理解とデンマーク看護研修 (中田 芳子)	「諸外国の異文化に触れ、そこから日本を考える機会にする」「デンマークを訪問し、社会・文化・福祉、および医療や看護の実際に触れ、これからの社会や医療・看護のあり方、自己のあり方について考えを深める」ことを目的として研修を行った。参加した学生全員が研修過程の中で多くの学びを得ていた。また、研修報告をまとめる中で、自分自身の生き方や日本の看護や福祉についてデンマークで学んだことと比較しながら考えることができ、目標が達成できた。
情報検索と活用 (平山 令明)	現代社会におけるさまざまな情報の中から必要なものを的確に効率よく見つけ出し活用する能力が求められている。看護学・生命科学系の文献データベース検索を実習しながら、将来医療現場で役立つ情報検索法、情報の整理・活用法を学習する。
情報の処理と分析 (須藤 真由美)	医療統計学の専門知識を持ち、医療データをコンピュータを利用して、客観的科学的に分析できることを目的とする。情報の的確な収集・整理の方法を理解し、表計算ソフトを利用して集計し、図や表などのさまざまな表現方法を学ぶ。
英語：スピーキング (Jon Mudry)	This basic level speaking class will focus primarily on learning to interact with classmates in English about various topics. There will be a small amount of listening and writing activities to facilitate more interest and supportive vocabulary and grammar.
英語：ライティング (Thomas Hanson)	This course will introduce students to paragraph writing. It will focus on creating short, well-written paragraphs leading to composition construction. Students will learn and practice the basic mechanics, involved in writing paragraphs and essays. Lessons will encourage accuracy and fluency through both structured activities and time for guided free writing. In order to pass the course, students must demonstrate their ability to handle these basic functions.

英語：リスニング (飯沼 好永)	病室で使われる基本的な英会話や日常生活の様々な場面における英会話を聞きながら、リスニング力並びに英語の表現を学習していく。またリスニングのスキルとして、全体を聞き取るもの、細かな情報を聞き取るもの、等の聞く目的にあったスキルを上手に使い分けることができる訓練も同時に行っていく。
英語：リーディング (中田 明子)	米国の看護師による文献を読解し、米国の看護教育・医療現場に触れる。医療情報・医療文献の読解・表現能力を身につける。単語一つ一つにとらわれることなく、内容の要点をつかめるよう指導を行う。英文の書かれている順に読解していくことに慣れるために「スラッシュ・リーディング」という方法(区切りごとに独立した意味をとる)を用いて学習を進める。
フィットネス理論・実習 (大津 克哉)	生涯にわたって健やかな生活を営むために必要な知識と能力を、理論と実習を通して身につける。「こころとからだの健康」を維持・増進するための、体力・運動・栄養・休養等に関する基礎知識を学習し、運動・スポーツの科学的知見に基づいた、エアロビクス運動(有酸素運動)・筋力アップ運動・コンディショニング運動を実践する。
スポーツ理論・実習 (大津 克哉)	スポーツの理論と合理的な実践方法を学習し、その良さを自ら生活に取り入れることができる能力を身に付け、生涯を通じての健康づくりと実践の方法を学ぶ。「卓球」「バレーボール」を授業教材として取り上げる。
現代医療論 (灰田 宗孝)	<p>医療チームの一員として質の高い看護を提供することの重要性を認識するために、現場の看護師をはじめ医師、薬剤師、栄養士、リハビリテーション技師、臨床工学技師あるいはメディカル ソーシャルワーカーなど他職種講師によりそれぞれの専門性につき学ぶ。そして、各専門職の人たちがどの様に看護職と連携し、また看護師に期待されるものは何かにつき理解を深める。</p> <p>講義の性格上、各分野の方々にお話ししていただくためにオムニバス形式とならざるを得ない。そのため、講義全体の一貫性に難が有ったため、2013年度からは、最終回に科目責任者による総括講義を行うことで、その欠点を補うこととした。</p>
疫学と生活環境 (相川 浩幸)	疫学・環境保健を中心に予防医学、保健統計、疫学、環境保健、母子保健、精神保健、地域保健、学校保健、産業保健、国際保健協力を含めて総合的に学習する。
人体の構造 (二見 眞一郎)	人体の構造を学ぶことは、临床上にて正常な人体の状態、それに対する病態を正しく把握するうえでの大切な基礎知識となる。本科目は名称など覚える事項も多く、さまざまなイラストやプリントを用いつつ基礎からしっかりと学んでいく。また授業内容と関連する身近な身体のおしくみに関する内容などを要所要所に盛り込んで解剖学への学生の興味をよりあげていくように努めながら進めていく。
人体の機能 (泉 義雄)	解剖学、組織学などの形態についての基礎的知識から、各々の器官の働きについての相互の関係付けを通して、個体全体としての働きに関心を持ち、生命現象を学習する。内部環境の恒常性、神経性調節、ホルモン調節などの人体の恒常性維持機能について学習する。神経系および感覚器については、人体の構造で学習するので除く。学習内容が多いので、できるだけ要点を整理して板書する。ノートを作りながらポイントの説明を行う。時間があれば国家試験の既出問題も解説する。

代謝と栄養 (泉 義雄)	人体は皮膚粘膜によって覆われ、外界と区別された固体であり、体内では血液・組織液を介して細胞一つ一つに栄養や酸素を運び渡らせている。細胞はそれらを使ってその細胞固有の機能を果たし、生産物や不要老廃物を血中に排出している。60兆個にもなる細胞の活動を保持するためには、体内に十分かつ適切な栄養素が取り込まれ円滑に代謝が行われる必要がある。代謝の乱れは、内部環境(体内環境)に乱れをきたす。この乱れこそが、病気である。学習内容が多いので、できるだけ要点を整理して板書する。ノートを作りながらポイントの説明を行う。時間があれば国家試験の既出問題も解説する。
感染と防御 (泉 義雄)	感染症の成立の条件(感染源、感染経路、感受性者)、病原微生物について概説する。感染症を飛沫・接触感染する疾患、食物を介する疾患、性感染症・血液を介する疾患、その他に分けて学ぶ。感染症の主要症状と治療について学び、感染症新法に定められているI類からV類の代表的疾患について学ぶ。院内感染についても学習する。学習内容が多いので、できるだけ要点を整理して板書する。ノートを作りながらポイントの説明を行う。時間があれば国家試験の既出問題も解説する。
臨床病態学Ⅰ (泉 義雄)	疾病の成り立ちと回復について学ぶ。まず、種々の疾患にみられる基本病変について学習した後に、呼吸器疾患、循環器疾患、消化器疾患、腎臓・泌尿器疾患について学習する。学習内容が多いので、できるだけ要点を整理して板書する。ノートを作りながらポイントの説明を行う。時間があれば国家試験の既出問題も解説する。
臨床病態学Ⅱ (二見 眞一郎)	臨床にて遭遇する様々な疾病について、それらの病態、症状、検査、治療法等について、イラストやプリントを用いつつ解説していく。本科目は脳神経疾患、血液疾患、内分泌疾患、アレルギー疾患、精神医学における疾病について解説する。また授業内容と関連する身近な健康、疾患等に関する内容などを要所要所に盛り込んで疾患への学生の興味をよりあげていくように努めながら進めていく。
看護学概論 (吉田 礼子)	看護・看護学とは何か。先人の考え、歴史の変遷、社会的位置づけなどを伝え、広い観点から看護の本質を考え自己の看護観を養うことをめざした。さらに、生涯にわたる学習・実践・探究の必要性和意義・喜びを見出せることをめざし、看護の現状と展望を教授した。授業評価はおおむね良好であったが、文献紹介を増やし自分自身で学習する方法を示す必要が示唆された。
看護アセスメントⅠ (蔵本 文乃)	看護の対象の健康状態を把握するために必要なバイタルサインの観察技術を含めフィジカルアセスメントの理論と方法を学習した。 講義は、人体の構造と機能などの人間を理解するために必要な基礎的知識を活用しながら理解を深め、講義ごとに試験を実施し基礎的知識の確認を行った。演習では、対象の心身の状態を把握する為に、正確な情報を収集する確かな技術とそれらの情報が示す意味を考える学習をした。バイタルサインの測定や基礎的なフィジカルアセスメントの技術の習得の確認のため、技術試験を実施した。今後も、解剖学や生理学に基づいた正しい技術の習得が出来るような講義と演習を目指す。

<p>看護アセスメントⅡ (吉田 礼子)</p>	<p>「その人にあった看護」の実践能力修得をめざし、看護過程のうち、アセスメントおよび問題の明確化について教授し、事例を用いた演習を行った。知識・技術を活用した柔軟な思考を重視し、クリティカルシンキングの概念もあわせて教授した。授業評価は比較的良好だったが、特に理解の困難だった学生がいたことから、学生個々の反応に応じた指導を心掛ける。</p>
<p>看護の基本技術Ⅰ (秋元 とし子)</p>	<p>看護実践の基礎として、看護技術のとらえ方を考えるとともに基本的技術としてコミュニケーションおよび安全を守る技術について学習する。①アートとサイエンスの融合としての看護技術について、②コミュニケーションとカウンセリング、③感染防止の技術について学習した。コミュニケーションについては、学生のそれまでの生活経験とのつながりを意識して学習できるようにした。</p>
<p>生活過程を整える看護技術Ⅰ (林 真理子)</p>	<p>その人の生活を支えていく生活の意義、生活環境、姿勢と動作、活動・休息・睡眠、着法、衣生活などについて基本的な援助方法を理論と実践を通して学ぶ。単に方法を学ぶのではなく、自らの生活と照らし合わせながら理論と関連づけて考え、他者への援助をするために必要な技術について学習する。</p> <p>上記の授業概要に基づき授業を実施した。</p> <p>上記の授業概要に基づき授業を実施した。授業の内容はわかりやすく、関心が持てる内容であったとの評価を受けた。定期試験の結果は全員合格であり、初学者にとって難しい看護技術の習得に向けて、知識と技術の統合を目指した授業の展開が出来たと考えられる。改善点としては、シラバスの内容が自己学習を進めるのに役立ったかが低率であったため、今後、シラバスの改善が必要であると考えられる。</p>
<p>生活過程を整える看護技術Ⅱ (林 真理子)</p>	<p>生活過程を整える看護技術Ⅰにひき続き、その人が健康でその人らしく生きるために必要としている身体の清潔、栄養と食生活、排泄など生活過程を整えるために必要な基本的な援助方法を既習の知識と技術を活用し、理論と実践を統合しながら学習する。単に方法を学ぶのではなく、自らの生活と照らし合わせながら理論と関連づけて考え、他者への援助をするために必要な技術について学習する。</p> <p>上記の授業概要に基づき授業を実施した。授業の内容はわかりやすく、関心が持てる内容であったとの評価であった。定期試験の結果も全員合格であり、看護技術の習得に向けて、知識と技術の統合を目指した授業の展開が出来たと考えられる。改善点としては、成績評価の基準が明確であったかが低率であったため、学生に成績評価の基準について、わかりやすく提示するよう改善する必要がある。</p>
<p>成人看護学概論 (中谷 啓子)</p>	<p>ライフサイクルの中の成人期にある人の特徴を学習し、成人期における健康問題がその後の発達に及ぼす影響について理解する。また、社会・環境保健対策について概観し、成人看護の役割を理解する。さらに、成人看護に活用可能な理論について学習し、成人期にある人、およびその対象への効果的なアプローチの方法について考え、理解を深める。</p> <p>グループワークの学習形態を用い講義で学習した知識・理論を用いて紙上事例を分析し、問題解決のためのアプローチの方法を検討した。教員がファシリテーターとなることにより、既習の知識・理論を統合・深化させ</p>

	<p>ることに成功し、学生が実際の活用方法やその価値について考える機会を提供することができた。</p>
<p>老年看護学概論 (鈴木 陽子)</p>	<p>①ライフサイクルの最終段階である老年期の特徴および高齢者の加齢に伴う身体的・心理社会的機能の変化と特徴を理解し、高齢者にとっての健康やQOLを考える。②人口構造や家族形態の変化と社会システム、高齢者の権利擁護等、高齢者を取り巻く社会の視点から看護の果たす役割を学習する。</p> <p>高齢者疑似体験演習では高齢者の日常生活上の動作の特徴や不自由さの理解、生活環境の工夫や援助方法について考える機会となった。また、高齢者の介護等の問題に関するグループワークは活発な意見交換ができた。しかし、高齢者にかかわる諸理論や高齢者の生活を支える制度や社会資源等については、やや理解に困難性があり授業内容や方法を再検討する。</p>
<p>小児看護学概論 (淵田 明子)</p>	<p>新生児期・乳幼児期・学童期・思春期それぞれの発達課題と健康問題について学習する。①乳幼児期の成長・発達と生活援助②学童期の子どもの成長・発達と生活援助③思春期の成長・発達と生活援助④小児期の健康の問題とその対策⑤小児と親の権利と看護倫理について学習する。自分の小児期を思い起こせるようにしながら授業を進めることで、小児の発達段階及び課題と小児に対する姿勢を学んでいた。今後は小児をより身近に感じられるように授業方法を構築していきたい。</p>
<p>精神看護学概論 (瀧澤 直子)</p>	<p>本科目では、ライフサイクルと精神保健の視点で、我々の日常生活に関心を向けながら、生活の場における精神的不調について学習し、精神看護学の基本概念を学習する。</p>
<p>基礎看護学実習 I (秋元 とし子)</p>	<p>実習目的は、患者と関わり対象理解をすると共に、患者—看護師の関わり場に共に参加し、看護について考える。具体的には①患者がどのような体験をしているか、②看護がどのように実践されているかに関心がもてる。③看護師の患者への気遣いや配慮に気づく④患者の入院環境を理解し、看護が医療チームの人々と協力しながら行われていることに気づく。⑤実習を通して自分についての理解を深め、今後の成長の方向性をえがく。</p>

2年生

科目名 (科目責任者)	授 業 概 要
看護と関係法規 (吉田 礼子)	看護の対象となる人(たち)の健康と幸福を守る活動に活用してゆけることをめざし、法の基本的理念と仕組み、看護師等についての規定、医療・薬事に関する規定、予防・衛生に関する規定、社会福祉に関する規定、労働に関する規定など幅広く教授した。授業評価はおおむね良好だが法律用語に難しさを感じる声があり、より具体的事象を交えた説明に努める必要がある。
社会福祉論 (岩田 香織)	病気や障害など何らかの健康上・生活上の問題を抱える人々への援助においては、病気・障害の回復を目指すのみでなく個人の生活を捉え地域社会で自立生活を営むことができるための支援が求められる。本講義においては法律に基づく生活者の生活問題に対する社会福祉の方法と課題について学習する。
臨床薬理学 (二見 眞一郎)	臨床治療においては薬物治療というものは大変に大きなウェイトを占めるものである。本科目においては、薬物投与での体内動態、有害事象などの基礎知識からはじめ、臨床で遭遇する様々な疾患への実際の薬物治療について、病態との関連等にも触れつつ解説する。また日常用いる身近な薬についての注意や話題なども積極的に取り入れ、学生が薬に興味をより多く持つよう学習できるように授業を進めていく。
臨床病態学Ⅲ (灰田 宗孝)	手術治療を中心に代表的な治療法および診断法を取り上げ、それらを取り巻くさまざまな関連領域についての理解を深める。また外科療法の代表的疾患を取り上げ、周手術期の管理と医学的諸問題について学習する。①救急医療と主要救急患者の病態と治療。②手術と麻酔について。③術式による生体機能の変化と主要な術後合併症の発生メカニズム、要因と患者への影響、予防的ケアについて。④代表的な腫瘍の外科的治療とそれらに関連する治療。⑤内視鏡下での手術の特徴・適応疾患、手術侵襲と回復過程。⑥日帰り手術の定義・適応疾患および条件、回復過程と退院基準。⑦画像診断の原理と実際。⑧放射線治療の原理と実際。⑨ME 機器とその管理。等について学ぶが、清潔管理とその概念が手薄で有ったとの反省から、本年度より医学部浅井先生による講義を追加した。
臨床病態学Ⅳ (泉 義雄)	病気の原因や病気の形、病態と機能や代謝の変化について環境への適応と関連付けて理解し、疾病の成り立ちの概要と治療・予防について学習する。①出生前の疾患と治療、性・生殖器の障害(産婦人科疾患)、②小児の疾患と治療、③整形外科的疾患と治療、④感覚器官の障害と治療(眼科、耳鼻咽喉科、皮膚科、歯科口腔外科)、⑤東洋医学について、医学部非常勤講師をまじえて専門的に理解を深める。学習内容が多いので、できるだけ要点を整理して板書する。ノートを作りながらポイントの説明を行う。時間があれば国家試験の既出問題も解説する。
看護倫理 (秋元 とし子)	看護の倫理は、個々のナースの思考と行動を導くものである。看護における知識・技術も倫理観の土台があってこそ生きたものになる。この科目では、①看護倫理についての基礎知識②看護者の倫理綱領③徳の倫理と原則の倫理④ケアリング⑤アドボカシー⑥インフォームド・コンセント⑦守秘義務等について、具体的な事例をもとに学習する。倫理的な問題を討議するために、グループ討議の回数をふやし学生間の意見の交流を促進した。

<p>看護の実践 (吉田 礼子)</p>	<p>「その人にあった看護」の実践能力修得をめざし、看護過程の後半部分にあたる計画・実施・評価について教授し、事例を用いた演習を行った。取り上げた問題について焦点アセスメント・計画立案し、具体策についてロールプレイで実施、評価・修正まで展開した。授業評価はおおむね良好であったが、個別性の活かし方についてより学びを深める教授方法を検討する。</p>
<p>看護の基本技術Ⅱ (秋元 とし子)</p>	<p>健康の段階やライフサイクルにかかわらず、検査・治療時に共通する技術である①診療過程における看護師の役割、②検査と看護の方法、③薬物療法と看護、④診察時の看護の方法について理論および演習を通して学習する。人体採血に向けての事前説明を十分に行い、学生が十分理解した上で患者役ができるように教育的に配慮を強化した。</p>
<p>健康の段階と看護 基礎技術 (蔵本 文乃)</p>	<p>急性の経過をたどる患者、慢性の経過をたどる患者、終末期にある患者、さらにこれらに共通するリハビリテーションを必要とする患者に分けて、各健康段階の概念と治療の特徴、患者のニーズや、看護の機能や役割について学習した。さらに、健康上の問題を解決するために必要な援助技術は、伊勢原校舎のスキルラボを使用し、より実践的な演習を行った。一次救命処置法は技術テストを実施し、全学生が確実な技術を習得した。また、学生の死生観を育むことを目的とし、デスカンファレンスを実施し、学生は、生や死について考える事が出来た。今後も、各健康の段階にある患者の状態がイメージでき、実習に繋げられる授業を行う。</p>
<p>基礎看護学実習Ⅱ (林 真理子)</p>	<p>既習の知識を活用し、臨床の場で患者とかかわり対象を理解し、その人が必要としている看護を生活過程に視点をおき、看護過程のプロセスにそって展開する。また看護実践を通し、看護観を深めることができる。上記の概要に基づき授業を実施した。実習を通して、その人に合った看護をするためには、患者と関わり対象理解することが重要であり、かつ根拠に基づいた看護をするために、看護過程の一連のプロセスが必要であることを学ぶことができた。また、実践を通して、看護について深く考え、看護観を培う機会となり、各自が今後の課題や方向性を見出すことができた。改善点としては、アンケートの結果、指導の一貫性についてと低率であったことから、教員と指導者が密に連携をとり、学生が混乱しないようにしていく必要がある。</p>
<p>成人臨床看護Ⅰ (丹澤 洋子)</p>	<p>手術は、生体に対して意図的に損傷を加えるものであり、患者は手術という侵襲を受けたことで、生命の危機や心身の苦痛状態にさらされる。周手術期(術前・術中・術後)に患者が体験するであろう心身の変化や様々な問題を予測し、順調な経過がたどれるよう、周手術期における患者の看護に必要な基礎知識と技術について学習する。</p> <p>授業内容のわかりやすさについて今年度評価が低くなっている。例年資料を用いて講義を行ってきたが、重要な項目の強調や既習の知識を活用し学生が考える時間を取り入れていくことを検討する必要がある。</p>
<p>成人臨床看護Ⅱ (中谷 啓子)</p>	<p>成人看護学概論の学習内容を基盤とし、慢性的な疾患や障害を抱えながらも、それを受容し人生のQOL向上を目指し生活を再構築しようとする成人期の対象について理解を深める。また、その対象への看護について学び、看護専門職者としての自己の在り方をみつめ、看護観を養う。</p> <p>技術プレゼンテーションを通し、演習グループメンバー、グループを越えた学生相互の主体的な学習活動を促進し、看護技術の習得度向上を図ること</p>

	<p>ができた。</p> <p>がん看護の単元においては、VTRの視聴（実際の患者）や認定看護師による講義を通し学生が感じた臨床現場に生じる諸問題についてグループ討議を行い、自己の考えをレポートにまとめた。看護観を深める機会を提供できた。</p>
成人臨床看護Ⅲ (丹澤 洋子)	<p>成人看護学概論で学習した知識・理論を基盤とし、さらに、慢性的な疾患を抱え疾病コントロールのため自己管理を必要とする成人期の対象について理解を深め、その対象への看護を学ぶ。また、この学習を通して成人期の特徴を踏まえた教育方法やセルフマネジメントについて学び疾患をもつ成人に対する看護の視点を養い、指導に必要な看護師としての能力について考えを深め、看護観を養う。</p> <p>学生は関心が持ててわかりやすい授業内容であったと評価している。授業内容について自分自身で学習するための方法の説明やシラバス内容が自己学習を進めるのに役立ったという評価は他の評価に比べ低くなっているため、既習の知識を活用した自己学習を促進する方法を検討していく必要がある。</p>
成人臨床看護Ⅳ (阿部 ケエ子)	<p>これまでに学んだ知識・技術を活用し、周手術期患者の看護過程を学ぶ。特に、周手術期各期の特徴的な状況に対応できるようアセスメントの視点を学び、問題解決能力の向上をめざす。</p> <p>また、急性の経過をたどる循環機能障害をもつ患者の看護に焦点を当て、迅速な判断・対処に必要な基礎的知識や精神的援助について学ぶ。</p> <p>看護過程の学習を通して、問題解決能力や自己の能力が向上したという評価が高かった。既習の知識・技術を活用するという点について、自己学習を促進することが不十分であったため、検討が必要である。</p>
老年臨床看護Ⅰ (飯室 淳子)	<p>高齢者は、加齢に伴い生じる様々な機能の変化により健康が脅かされやすい状態にある。その変化の特徴を踏まえて、高齢者の誰もがができる限り健康的な生活ができその人らしい人生を送れるように支援する役割が高齢者を支える看護に求められる。本科目では、老年期に特徴的な障害・疾患について理解し、健康を支えるうえでの看護の技法や様々な症候や状態・状況に応じた看護について学習する。</p> <p>内容毎に作成した資料を配付し、視聴覚機材も用いて授業を実施した。自立支援を含め、高齢者の生活に役立つ教材提示を積極的に進めていく。</p>
老年臨床看護Ⅱ (後藤 雪絵)	<p>超高齢社会を豊かに生きるためには、各個人が主体的に健康への関心を持ち、その人らしい生活が営めるようなヘルスプロモーションの視点をもつことが大切である。あらゆる療養の場、生活の場での看護の役割を認識し、高齢者の強みに焦点をあてた包括的なケアマネジメントの視点について理解する。</p>
小児臨床看護Ⅰ (橋田 節子)	<p>小児看護学概論で学習した成長発達の段階をふまえて、小児期の主な疾患や症状、検査や治療などのさまざまな状況にある子どもと家族の看護について学習する。子どもにとって病状や治療は苦痛であるだけでなく、成長発達の継続に大きく影響するため、苦痛をできるだけ取り除き、子どもらしく療養できるような援助技術について学習していく。その中でも療養中の子どもにとって遊びは、治療に円滑に参加し、成長発達を継続し、自らの力で病気や問題に向き合い健康の回復を促すために大きな意味をもつ。演習では小児看護の視点で遊びの援助技術の方法について実際に学び、病気の子どもへの遊びの援助技術の活用についてレポートをまとめた。次年度は、発達に応じ</p>

	た援助だけでなく、病状や治療による影響について理解を深められるように演習の振り返りを共有できるようにしていきたい。
小児臨床看護Ⅱ (淵田 明子)	健康レベルに応じた小児の看護と健康を障がいされた小児とその家族についての看護方法について学習する。①健康レベル各期における小児とその家族の看護について学習する。②母子相互のニーズを把握し、家族参加の必要性を認識しながら健康を障がいされた小児とその家族について、個別的な看護の方法について学習する。様々な事例を紹介しながら授業を行うことで一人ひとりが考える機会となった。今後は事例から看護過程がより深く考えられるよう取りこんでいきたい。
性・生殖と看護 (望月 好子)	女性および男性の心身の特徴をふまえ、人間にとって健やかな「性と生殖(セクシャリティ)」とは、リプロダクティブ・ヘルス/ライツ、母(父)と子との関係性や家族形成期における母性の健康問題とそれをとりまく社会資源や行政・保健統計などについての理解を深めることを通して、多くの視点から母性の対象が捉えられることを目指した。資料や映像を活用しながら学生のイメージ化をはかり、より身近な課題および問題として考えられるようにした。特に後半の内容が時間に追われた感じになってしまうので、今後は母性保健行政や施策についての内容を充実させていく。
母性臨床看護Ⅰ (小川 景子)	妊娠・分娩・産褥期にある対象の身体的・精神的・社会的特徴を理解し、健康的な生活が送れるよう援助するための基礎的知識の習得をめざした。学習項目は、以下の3点に大別される。①妊婦の健康生活への援助 ②分娩準備教育と分娩各期の看護 ③褥婦の健康生活への援助 講義に際しては、映像や模型を活用しイメージ化をはかった。また、当該科目に関連する社会・文化的事項に関心を持つことをねらい、①産育慣習(習俗)、②周産期医療に関する現状と課題を、レポートテーマとした。レポート作成を通して現状を認識し、自己の考えをまとめる機会となっているため次年度も継続する。
母性臨床看護Ⅱ (望月 好子)	周産期にある対象への看護の理解を深め、母性看護学実習の中で活用できるようにするために、周産期における援助に必要な知識と技術の習得を目指した。特に、この科目では、新生児の生理的な特徴とその看護を理解し、周産期看護に特有な援助技術について演習を通してその実際を学ばせた。また、事例による看護展開および保健指導案等の立案・実施を通して、ウェルネスを取り入れた看護過程展開および母性の対象の特性についての理解を深めた。新生児の沐浴技術は、臨床現場での実施が難しくなったため、学内演習で確実に実施しておく必要があるため、これまでも全員実施としていたが、今後も必ず全員が演習にて実施できるように計画実施していく。
精神臨床看護Ⅰ (吉野 由美子)	精神看護学概論で学習した基礎的知識を活用しながら、精神の健康の維持・回復を支援するための基本的な考え方、現象の捉え方、援助方法を学習する。目の前の現象だけでなく、その背景を知り、対象の立場からその意味を考え、対象像を描き、看護の方向性を定めていくためにはどのようなものの見方・考え方をしていけばよいのかを事例をもとに学習した。学習方法として、メディアを活用することで、看護学的な視点を修得し、対象理解が深められた。更に、演習では、精神の安定を促す手立てを自らが体験し、その効果を主観的・客観的に評価し学ぶことができた。演習環境の整備と事例を精選し対象理解をより深められるようにすることが課題である。

精神臨床看護Ⅱ (瀧澤 直子)	精神臨床看護の対象は、疾病と障害を併せ持つことで何らかの生活上の問題を抱える人であり、また健康な側面を持つ人である。生活の主体者はあくまでも精神障がい者本人であると捉え、自己決定の原則に立って援助を考えてみる。
在宅看護概論 (中田 芳子)	<p>在宅看護では、地域で生活しながら療養する人と家族の両者が対象となる。そのため、療養者や家族の療養生活がよりできるよう支援方法について学習しながら、看護の役割を理解する。①在宅看護の位置づけと役割②在宅看護が求められる社会的背景③施設内看護と在宅看護の相違と特徴④家族の理解と健康支援⑤継続看護の必要性などを学習内容とする。</p> <p>介護保険や訪問看護に関する基本事項について、小テストを2回行い、知識の定着を図っている。また、施設内看護と在宅看護の相違については、グループワークを行い、発表することにより主体的な学習ができるよう工夫している。これらのことにより、学生がイメージしにくい部分を歩行することができていると考える。</p> <p>来年度は、今まで在宅看護論Ⅰで組み込んでいた訪問看護師の実践の講義を行い、早期に在宅看護のイメージ化ができるようにする。</p>
在宅看護論Ⅰ (新村 直子)	在宅で暮らす療養者は、多様な療養者や家族の希望や状況に合わせてケアを提供する必要がある。在宅看護論Ⅰでは、基礎看護学などで学習した内容を基に、在宅における療養者と家族の日常生活援助を通じて、創意工夫や経済性を考慮した援助方法について理解を深める。また介護・看護に関する新聞記事の切り抜き・コメントを記述するなどを通じて、家族や高齢者を取り巻く社会の情勢について理解を深めた。次年度は、何らかの障害を持ちながら自宅で暮らす人々についての理解が学生は難しいため、イメージが喚起できるような工夫が課題である。
在宅看護論Ⅱ (中田 芳子)	<p>在宅看護を学ぶ上で医療機器を管理は重要になっている。在宅の場合は看護師自身が理解し、そのことを療養者や家族に指導することが必要となるので、他領域で学んだ看護技術の復習をしながら授業を進めている。また、家庭という場で行われる看護のためコミュニケーション技術は信頼関係を築いていく上で重要となるので、療養者と家族及び訪問看護師とのコミュニケーションについてロールプレイをしながら学んでいる。</p> <p>コミュニケーションについては、事例をグループで考え、演じることにより各自が3年生での在宅看護論実習をイメージしながら学ぶことができている。医療機器を使用しながら在宅で療養している人の看護については、時間数が限られているのでポイントを指導している。来年度は、在宅看護論Ⅰに一部の講義を移動し、この部分の学習を充実させていく。</p>
看護と医療安全 (千葉 美果)	医療事故は日常的に発生する可能性があることを認識し、過去の事故事例なども用い、なぜ事故が発生したのかを考え、医療事故を自分自身にも生じる身近な問題として捉える。また、人間工学に基づいた人間の行動理解をすることを目的に日常生活を振り返り、自分の身の回りの安全対策について考えるために、『生活の中にある安全対策』を調べ発表することで、より安全対策を身近に捉えられるよう工夫をおこなっている。医療安全の最新の教科書の1つは臨床での取り組みであるため、臨床の看護師の講義も受け、医療安全について考えるとともに、学生の安全意識を高められるよう授業を構築していきたい。

<p>家族看護学 (新村 直子)</p>	<p>人々が暮らしていく中で、「家族」は同居の有無にかかわらず重要な存在である。家族は、家族員の誰かが病気や障害を抱えたときに、一時的にその機能は障害されるが、徐々に本来の姿を取り戻すよう変化していく。授業では、このような「家族の概念」について学習し、自分の家族観と比較し「家族」について捉え直し、その看護のあり方を考えていく。次年度は、学生が何らかの障害を持った療養者の家族メンバーの心の動きや生活の変化を考えられるよう、事例をもとにディスカッションを行い、家族への支援の必要性や支援の在り方についてイメージできるような工夫をする。</p>
<p>看護研究の基礎 (吉野 由美子)</p>	<p>専門職として、人びとにより質の高い看護を提供するためには、看護実践の中で生じた看護についての疑問や問題、課題を科学的に探求していくことの必要性を考え、研究計画立案をグループワークにて体験した。その過程から、看護研究の目的と意義、看護研究の過程を理解し、看護研究を行うための基礎的理論を学習した。また、グループワークの経過を発表する機会を設け、プレゼンテーション能力を育めるようにした。グループごとに細やかな指導が適切に行うためには、演習時の人員確保が課題である。</p>
<p>看護の理論 (丹澤 洋子)</p>	<p>看護の理論は、看護の目的、対象の見方、ケアの方法を導き、看護師の看護実践を支えるものである。この授業では、看護理論家（ナイチンゲール・ヘンダーソン・オレム・トラベルビー・ペプロウ・ウィーデンバック・キング）の提唱する理論について学習し、自らの看護に対する考え方に活用し看護観を深めるとともに、実践の場で活用できるための素地づくりをめざす。</p> <p>理論という言葉に対して、学生は難しいという印象を持ったため、できるだけ理解しやすいように、また関心を持てるよう配布資料や視聴覚教材など情報の提供について工夫したことは高評価であった。限られた時間の中で、各理論の理解に留まらず、自己の看護観を深められるような授業の工夫が必要となる。</p>
<p>生命と倫理 (望月 好子)</p>	<p>現代の科学技術の発展に伴い生命にかかわる医療技術も目覚しく発展し、それゆえの新たな倫理的な問題も多く指摘されるようになってきている。この科目では、先端医療と生命倫理についての様々な問題の現状を知り、学生個々の人間観・死生観・倫理観を深めていくことをめざした。授業は、講義・映像視聴・グループディスカッションを基本構成として実施し、感想カードやレポート内に、学生個々の考えが表現できる機会を作った。提出されたレポート等から、倫理的な話題に関しては正答がないからこそ、一人ひとりが十分に考え取り組まなくてはいけないことを理解できていたと考える。今後も学生の思考や感性を揺さぶれるような授業を構築していきたい。</p>

3年生

科目名 (科目責任者)	授 業 概 要
看護のマネージメント (千葉 美果)	看護のマネージメントは、看護師を管理することではなく、看護ケアを提供するうえで必要とされる様々な知識・技術をどのように発揮すればよいのか考え活動することである。組織が機能するには、組織のトップだけが行動すればよいのではなく、個人がどう行動するかも必要になってくる。そのため、管理者が行う管理だけではなく、看護学生を含めた個人がどのように行動することがマネジメントになるのかを考えることが必要になる。学生1人1人ができる看護管理とは何かを考え、発表することで「看護管理」をより身近に感じ、個人に求められるマネジメントについても考えられるようになったと思う。
災害看護と国際看護活動 (淵田 明子)	災害直後からの支援を含め災害時における看護について学習すると共に、発展途上国での看護活動、共通課題に対する国際的取り組み、災害時の国際協力など看護の国際活動についての認識を深め、ますますグローバル化が予測される世界における看護活動の未来について考える。社会的視野が広がり看護を幅広く捉えることができた。今後は、復興・静穏期までを含めた災害看護を深めらるるようしていく。
成人看護学実習 (中谷 啓子)	<p>看護の対象としての成人を理解し、その対象に応じた看護実践を通して成人看護の特徴を学習することを目的とする。</p> <p>中核目標①各健康レベルにある成人の特徴を理解し、その対象が直面する健康問題およびその解決に向けた看護の特徴を理解する。②個別性に応じた看護を展開する。③医療チームにおける看護の機能を理解し、自己の役割を認識し行動する。④対象への看護を通して、自己の看護観を養う。</p> <p>ほぼ全員成人期の患者を受け持ち看護展開することができた。また、高度救命救急センター、手術室、ICU、透析室、ホスピスにおける学習経験を発表・討議することにより、各健康レベルにある成人及び成人看護の特徴に関し理解を深化させることができた。</p>
老年看護学実習 (鈴木 陽子)	<p>老年期にある対象の理解と自立した生活を支援するための看護の役割を理解する。介護老人福祉施設実習では介護老人福祉施設における高齢者の特徴と高齢者を支援する職種間の協働・連携について理解する。病院実習では、疾病を持ち治療過程にある高齢者の特徴と療養状況に応じた看護の実際から、看護の役割を理解するとともにソーシャルサポートシステムを理解する。また、高齢者の生活の場を通して、QOLを高める援助を実践する。</p> <p>介護老人福祉施設実習では老人福祉法や介護保険法の理解が課題であり、事前学習を強化する。また、病院実習においては高齢者のフィジカルアセスメントの事前演習および高齢者のソーシャルサポートシステムの事前学習を強化する。</p>
小児看護学実習 (淵田 明子)	小児の健康問題を総合的に判断し、健全な育成をめざして小児及び家族に対して個別的な看護が実践できる基礎的能力を養う。①健康を傷害された小児の入院生活場面から、病気及び入院が成長・発達に及ぼす影響を考える。②疾病の経過に沿って必要な援助を考え実践できる。③母子相互のニーズを把握し、家族参加の必要性を認識する。④小児保健医療チームにおける看護職の役割と責任を理解し、に協力できる能力を身につけることを学習する。

	臨床指導者と連携しながら学生個々の学習状況にあわせて目標達成できるように心がけた。今後は疾病の経過に沿った援助ができるよう指導を強化していく。
母性看護学実習 (望月 好子)	「周産期の対象理解、看護過程の展開、母性看護に必要な知識・技術・態度の学習、生命の尊厳や母性について自己の考えを深める」ことを目標に2週間2単位の实習を実施した。春休み課題として課題レポートおよび事前学習を提示し例年通り実習初日に課題レポートの発表会を実施し、実習へのモチベーションを高められた。今年度から諸事情より新生児の沐浴は、スタッフによる実施の見学と沐浴指導場面の見学を中心にすることにした。そのことにより起こる問題は特になかった。課題レポート発表会やNICUでのカンファレンス・全体カンファレンスなどを通して、生命倫理観・看護観・人間観を深めることができた。次年度も同様に進めていく。
精神看護学実習 (瀧澤 直子)	精神保健上の問題を抱える対象が、その人らしくその問題解決ができるように関わりながら精神看護の機能について学ぶ。そのためには対象の発達段階・健康障害の種類・健康の段階・生活過程の特徴を捉え、対象理解を深め看護の方向性が描けるよう指導する必要がある。レクリエーションの企画・運営を学習計画とし、チームの中での自己の役割、集団への働きかけ、個別の対象の特性を把握し、柔軟に関わることを学ぶ機会としてきたが、本来、ケアは看護の必要性から導き出されるものである。従って、今後は学習計画から削除し、必要性を基に個別にケアの計画・実施ができるようにしていく。
在宅看護実習 (中田 芳子)	在宅療養者とその家族の多様性と個別性を理解し、看護の役割と他職種との連携について学習する。また、外来看護の役割と特徴を理解し、施設内看護と在宅看護の継続や相互の連携について学習する。 今年度は、入退院センターの実習の学びを学生の実習記録を基に分析し、研究発表した。その結果から、次年度は実習目標を一部修正することにした。 次年度の3年生の学生数が多いので、訪問看護実習施設を3施設新規に開拓し実習する予定である。
統合実習 (吉田 礼子)	看護実践能力の修得、とくに看護ケアのマネジメントについて学ぶこと、チームとの連携を考慮して看護を計画・実践すること、学んできたことを統合して看護の本質について考え看護活動に活かすことを学習目標として重視し、看護チームの活動に参加しながら受け持ち患者の看護の展開を求めた。受け持ち患者看護とチームの看護活動との調整に難しさを感じる声があった一方、最終的に看護観やチームの大切さを感じ充実した実習であったという声もあり、授業評価としてもおおむね良好であった。目的・目標の理解と行動計画への助言をさらに充実させることが必要である。